

寺田竜太：そしてこれからの 10 年

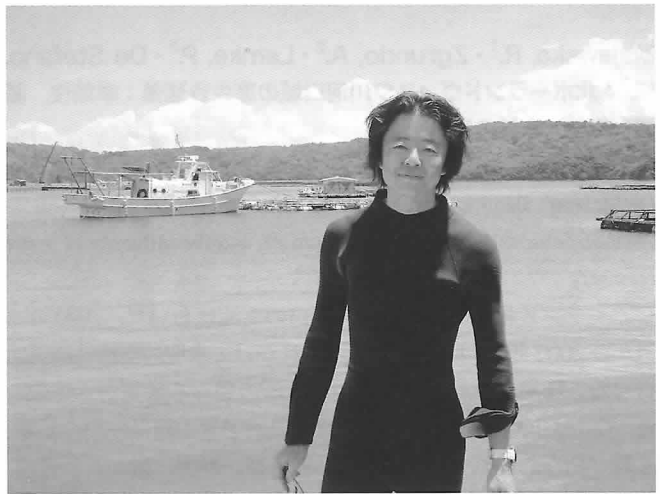
ここまで、日本藻類学会に対する思いや将来の展望等について、これからの藻類学を担う研究者の方々にご寄稿いただきました。藻類学は基礎から応用までを含む多様な専門分野で構成されますが、ご寄稿いただいた皆さんはそれぞれの分野において本学会との出会いがあり、会員の方々との交流を深めながら、ご自分の研究分野を切り開いてこられています。60 周年のメッセージといえば、私の場合は鹿児島大に赴任後間もない時に、すでに 50 周年のメッセージを寄稿させていただいています。今読み返してみると、書いてあることはほとんど進展しておらず、この 10 年間に研究者として成長していないことを猛省させられます。これからの展望などは書くに値しない人間ですが、本企画の編集に携わった者として、現在の藻類学会と今後の展望について、(自分への戒めを含めて)最後のまとめを記させていただきます。

学会会長の堀口健雄先生が記されているとおり、この 10 年間での思い出深い出来事は、第 9 回国際藻類学会議 (IPC9, Tokyo, 2009) を国際藻類学会との共催で開催したことです。私も実行委員として携わりましたが、大会を先導する先生方の指導力と実行力、そして体力(もしかしたら気力?)に深く感銘を受けました。藻類という研究分野が社会的にも注目されるようになり、学会が発展したことは、このような先生方の存在によるところが大きいことを実感します。

学会のこれからの 10 年を考える場合、「中堅や若手」と呼ばれる私たちが、それぞれの分野のブレイクスルーとして先導する人材になれるかどうかと言っても過言ではないかもしれません。また、次の時代を担う若い研究者を育てていくことも重要です。ポストクの雇用の安定性の問題など、若手研究者を取り巻く課題には根深いものがありますが、藻類の研究や技術開発、社会貢献という生き方に魅力が持てるような環境を育てていければと考えています。

この 10 年、私自身が会員の方々と共に携わった大規模な調査を振り返ってみると、環境省の自然環境保全基礎調査浅海域生態系調査とモニタリングサイト 1000 沿岸域調査が思い出されます。前者は日本全国の藻場の現状を 130 ヶ所あまりで調査したもので、磯焼けや藻場の衰退、温暖化の影響を目の当たりにした調査でした。後者は現在も続く事業ですが、全国 6 ヶ所で藻場の経年変化を毎年モニタリングしています。論文が書けるような調査ではありませんが、社会貢献や情報発信として重要な使命を担っています。短期間で結果が求められる時代ですが、長期的な視野に基づいたこのような事業が今後とも評価されることを期待しています。

藻類学会は他の生物系の学会と異なり、基礎から応用までの幅広い分野を含んでいます。藻類の応用や利用といえば、食品や工業原料等が主な用途ですが、炭化水素を産生する藻類の利用など、新たな利用に関する技術開発が世界的に注目されています。これらの研究は、新たな産業や私たちの暮ら



しを変える可能性を秘めているものですが、吉田昌樹さんをご指摘のように、藻類以外を専門とする方々との関わりなしに成し遂げることは不可能だと思います。私たちは普段、藻類という生き物について研究していますが、知らず知らずのうちに「藻類」という名の塀を自分の周りに張り巡らしているのかも知れません。塀を取り払い、藻類以外の分野の方々との交流を深めることも、藻類学会の価値と可能性を高めていく上で必要であると考えています。私自身も、藻場から造礁サンゴへの生物群集の変化について、サンゴや魚類の方々と共同研究を始めました。九州では、藻場の減少と共にサンゴの増加や魚類群集の変化が指摘されていますが、藻類の視点だけでは全容は解明できません。研究対象を藻類に固執せず、幅広い視点と交流で研究課題に取り組んで行ければと考えています。

研究を取り巻く環境を振り返ってみると、この 10 年で情報のデジタル化に拍車がかかったと思います。例えば顕微鏡等の撮影技術がそうですが、フィールドでの撮影も大きく変わりました。一回の SCUBA で、ニコノスを使って一度に 36 枚しか撮影できなかった水中写真が、デジカメとハウジングの普及で何百枚もの写真や動画が撮影できるようになりました。60 周年記念の DVD に納められている写真類もこのような技術革新によるものとも言えます。ペーパーレス化も拍車がかかりましたが、もしかしたら 10 年後の藻類は電子媒体のみかもしれません。よいものは残しつつ、これらの技術革新が教育や研究の高度化や普及に活用されていくものと強く信じています。

最後になりましたが、日本藻類学会が 60 周年を迎えたことを心よりお喜び申し上げますと共に、皆様のご活躍、学会の発展をお祈り申し上げます。

(和文誌編集委員会委員長、鹿児島大学水産学部)